

英語で「書く」能力をいかに伸ばすか

大 西 光 興

How to Enhance Students' Ability to Write in English

Mitsuoki OHNISHI

Abstract

It is becoming a serious problem that academic abilities of most college students in Japan have been deteriorating every year. Especially, the lack of their skills in English as the means of international communication might endanger the future of Japan, for it is they who will have to share in bearing the burdens of global issues in the near future. We college teachers of English must try every possible measure to improve and enhance our students' skills in English so that they can realize their future objectives on a global basis.

This paper aims at finding some effective methods to improve their writing in English. 56 second-year students of Bunkyo University are the subjects of this on-going research. The following is a summary of what has been found in their answers to the questionnaires and their free compositions in English.

- (1) Most of the subjects are interested in learning English in spite of their poor ability in using English.
- (2) About half of them feel that they are very poor at writing English.
- (3) Very few of their free compositions are free from some errors in spelling, grammar, and idiomatic expressions.
- (4) Many of them have not reached an advanced level in structuring proper passages in English.
- (5) Some strategies to solve those problems in their English writing skills are proposed, the effectiveness of which will be reported after testing these strategies on the subjects.

1-0 はじめに

大学の大量化と共に学生の学力低下が深刻な問題となっているが、特に英語力、とりわけ、英語で「書く」能力の不足はまさに憂うべき状態である。一方、あらゆる分野でglobalizationが急

速に進行している現在、その状況に適応し得る外国人とのcommunication能力が一層強く求められている。その要請に応じられる十分な適性と外国語（特に英語）の運用力（特に「発信力」）を身につけた学生を大学はいかにして社会に送り出すことができるのであろうか。大学における外国語（英語）教育に課せられた課題は極めて大きい。

この課題に取り組む努力はすでに大学英語教育学会等の会員によって精力的に行われてきているが、大学の多様化に伴い、学生も多様化してきて、他の大学で成果を挙げた指導法がそのまま本学の学生に適用できるとは限らない。そこで、まず、実態を把握するために本学国際学部2年生の平均的レベルの2クラスを対象に英語学習に関するアンケート調査と自由英作文を行なった。その分析の結果をふまえて、より有効な英語指導法を考察したい。

1-1 英語学習に対する興味の実態

英語学習を根底から支える力は英語学習それ自体に対する興味である。英語に対して心理的に拒否反応を示す学生には通常の指導法では効果が期待できないであろう。アンケートの(1)は「英語学習に対する興味の変化」を中学1年時から大学1年時にわたって自己判定をさせたものである。

(表1) 英語学習に対する興味の変化

興味度	学年							
	中1	中2	中3	高1	高2	高3	大1	合計
大 好 き	17 (30%)	13 (23%)	12 (21%)	4 (7%)	5 (9%)	4 (7%)	4 (7%)	59 (15%)
好 き	14 (25%)	15 (27%)	20 (36%)	21 (37%)	18 (32%)	19 (34%)	23 (41%)	130 (33%)
普 通	20 (36%)	23 (41%)	18 (32%)	19 (34%)	19 (34%)	17 (30%)	22 (40%)	138 (36%)
嫌 い	3 (5%)	3 (5%)	4 (7%)	10 (18%)	13 (23%)	11 (20%)	4 (7%)	48 (12%)
大 嫌 い	2 (4%)	2 (4%)	2 (4%)	2 (4%)	1 (2%)	5 (9%)	3 (5%)	17 (4%)

まとめ

- 1 大学1年時において英語学習に対する拒否反応を示した者は7名（12％）に過ぎない。つまり、大部分の学生は出来ばえは別にして、英語学習に対して興味を示している。
- 2 英語学習に対して拒否反応を示した者の数をもっとも多かったのは高校3年時で、16名（29％）いる。大学受験のための英語学習に興味を持てなかったと推測できる。
- 3 中学時代に英語学習に対して拒否反応を示したものは極めて少ない。（平均5名：9％）

以上の結果から、学生達は大学受験の重圧を脱して英語学習に対して十分興味を持てるようになっていると考えてよいであろう。今こそ、学生達に英語学習に対する興味を十分満たし得る指

導法を具体化し実践することが急務である。

1-2 英語学習の問題点

英語の4技能(「読むこと」、「書くこと」、「聞くこと」、「話すこと」)の中で本学部学生がもっとも苦手としているのはどの技能であろうか。アンケートの(2)の答えをまとめてみると、英語で嫌いな分野と主な理由として次のように答えている。

文法	13名(23%)	理解しにくい、やっかい、単調、忘れやすい。
作文	9名(16%)	正確に書けない、文法力不足、例文暗記が辛い。長文が書けない。
読解	7名(12%)	長文を読みこなせない。語彙力不足、訳読だけで退屈。
スピーチ	4名(7%)	発音が難しい。英文が出てこない。
単語暗記	4名(7%)	めんどろくさい。
無答	19名(35%)	

以上の結果から全体の半数が「書くこと」に関連する分野を苦手としていることがわかる。逆に「書くこと」が好きと答えた者はわずか1名に過ぎない。

高校では「英語I」、「英語II」、「Reading」、「Writing」「Oral Communication A or B or C」が指導されているが、コースによっては、「Writing」を履修しない場合もあり、この分野での学習経験に差がある。「Writing」の授業方法についての問いには、教科書に沿って語句と短文の暗記、問題練習(文法と和文英訳中心)と答え合わせ、解説、という従来型の方法と答えた者が殆どで、生徒に自発的に自由な発想で英文を書かせたと答えた者は、わずか1名であった。英語を用いての海外文通の経験の有無については、1回でも経験があると答えた者は12名(21%)に過ぎない。

以上の結果から、このアンケートに答えた学生(本学国際学部の平均的2年生)の英語学習上の最大の問題点は英語で長文を書くことが特に不得手であるということである。

2-0 自由英作文に現われた問題点

本年4月の最初の授業時にMy Dreamという題で30分間に好きなだけ気楽に英文を書かせた。語彙力不足のために書きたくても英語が出て来ない場合は日本語をローマ字書きで英文中に混入することを許し、とにかく文法ミスなど気にせずのびのびとできるだけ多くの英文を書くように指示した。以下が無作為に選んだ20編についての問題点である。

2-1 文法力から見た問題点

冠詞の脱落や誤用、主語と述語動詞の呼応違反、名詞と代名詞の誤用、名詞の可算不可算の混同、形容詞と副詞の混同、前置詞の誤用など、誤りを拾いだすと際限がない。英文構成上特に重要と思われる、動詞の用法に的をしばって誤りの実態を調べてみると次のようであった。

1 自動詞の他動詞化

go Hawaii(Australia,the world 等) 11例

work a travel company(the cafe等) 3例

come my school / stay Australia / listen songs / graduate this university / trip foreign countries 以上各1例

2 他動詞の自動詞化

see there(over the world) / enjoy to my life / marry to a foreigner / do to realize my dream

3 不定詞の形態の誤り

toの脱落 want go(speak, study) / like cook

toの後の動詞脱落 try to this (do の脱落)

want to a nice job (haveの脱落)

4 受動態の誤用 Everybody will move heart.

I interested in history.

20編のT-unit総数(250)中、受動態使用を試みたのは12 unit(5%)に過ぎない。能動態しか使用できないということは表現力の未熟さを物語っている。

5 時制の単調さ

基本3時制にとどまり、完了形、進行形、完了進行形は殆ど使われない。

2-2 文章構成力から見た問題点

書く能力の成熟度を数量的に計測する方法として、LaBrant(1933)の「従属指標」(Subordinate Index)(全述語数に対する従属節中の述語の割合)と、Hunt(1970)「T-unit」(一つの主節を含み一つ以上の従属節があればそれも含んだ言語単位)がよく用いられる。これらを本学部学生の自由英作文(無作為に選んだ20編)に適用して計測した結果は(表2)の通りである。

まず、従属節を概観してみると、総数57個の従属節を導く語の使用に片寄りが目立つ。

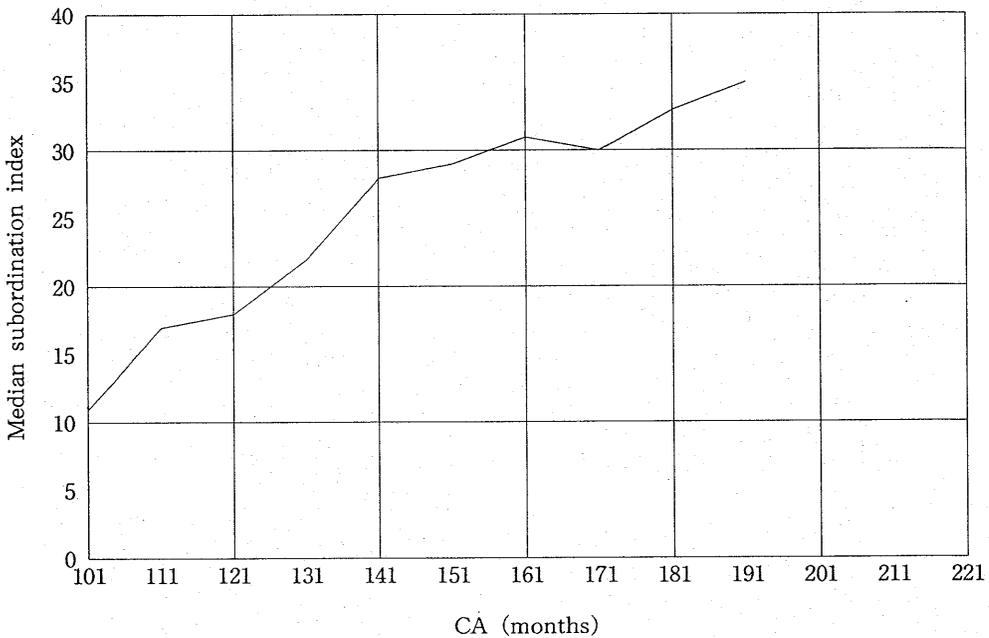
that	(動詞の目的となる名詞節を導く)	13	
when	(時を表す副詞節を導く)	13	
if	(解放条件節を導く)	7	
	仮定法の正しい使用例は皆無		
that	(関係代名詞)	6	
what	(関係代名詞)	5	
because	(ただし、Becauseで始まる独立節は除く)	4	
what	(間接疑問文)	4	
	(関係代名詞)	4	
since	(時), why (間接疑問文)		} 各1
why	(関係副詞), who (関係代名詞)		
where	(関係副詞)		

(表2) 無作為で選んだ20編の自由英作文の英文構成上の特徴と成熟度

調査項目 作品	文の総数	総語数	1文当りの 平均語数	複文数	従属指数	T-unit 総数	1 T-unit 当りの平均 語数
A	15	153	10.2	2	13 %	20	7.7
B	16	129	8.0	9	56 %	14	9.2
C	13	83	6.4	5	38 %	13	6.4
D	9	73	8.1	1	10 %	9	8.1
E	12	100	8.3	1	8 %	12	8.3
F	23	196	8.5	6	26 %	26	7.5
G	5	39	7.8	2	40 %	6	6.5
H	14	123	8.8	3	21 %	19	6.5
I	14	124	8.8	4	29 %	16	7.8
J	11	61	5.5	0	0 %	11	5.5
K	14	111	7.9	3	21 %	15	7.4
L	8	112	14.0	3	37 %	10	11.2
M	11	118	10.7	6	55 %	14	8.4
N	12	87	7.3	4	33 %	15	5.8
O	7	65	9.3	2	29 %	7	9.3
P	14	128	9.1	1	7 %	14	9.1
Q	9	70	7.8	0	0 %	10	7.0
R	4	36	9.0	0	0 %	4	9.0
S	10	126	12.6	4	40 %	12	10.5
T	8	99	12.4	1	13 %	11	9.0
平均	11.5	102	8.9	2.9	24 %	12.9	8.0

次に(表2)の結果から、本学部の平均的2年生の文章構成力は、語彙不足や文法の誤りを無視すれば、LaBrantとHuntが示している英語を母語とする子供に対する調査結果(表3-1)及び(表3-2)と比較すると、かなり低い成熟度であることが推定できる。学生にとって外国語である英語で書くという重荷を背負わされているにせよ、文章構成力が十分成熟していないことは確かで、早く成人の文章構成レベルまで向上させる訓練を施さなければ、社会では役立たない。

(表3-1)



従属指標 (La Brant, 1933より転写。CAはChronological Age)

(表3-2)

T-unitと節の長さの発達

	小学校			中学校	
	3年	4年	5年	1年	2年
T-unit: O' Donell	7.67	—	9.34	9.77	—
Hunt	—	8.51	—	—	11.34
節: O' Donell	6.5	—	7.4	7.7	—
Hunt	—	6.6	—	—	8.1

[Hunt, 1970]

(注)表3-1) (表3-2) は「英語のライティング」(pp.54,56) による。

2-3 Communicationの観点からの問題点

英語で「書く」という行為を学生は一般に、

- (1) 英語を見て、書き写す。
- (2) 英語を聞いて、書き取る。
- (3) 英語の質問に対する答えを書く。
- (4) 課題として与えられた和文英訳をする。

以上のような教室だけで行われる。教師主導の学習活動であると思い込んでいる。Grabe (1996)によれば、書く行為とは「情報伝達という問題が書き手と、書き手の意図する読み手との間で解決されるようにする、体験的に学習される (heuristic) 行為」である。要するに、「書くこと」とは書き手と読み手の間で行われるcommunication活動なのである。従って、書き手は読み手とのcommunicationが成就できるように書かなければならない。Griceは会話が円滑に行われるために会話者が守るべきルール (maxims of conversation) を5項目示しているが、書き手と読み手との間のcommunicationにも、これらのルールを次のように読み変えて適用してもよいであろう。

- (1) 協調の原則 (The cooperative principle)

書き手は読み手との間の情報伝達の目標達成に必要とされる貢献をすること。

- (2) 質の格率 (The maxim of quality)

書き手と読み手の間の信頼関係を保つために、偽と信じていることを書かないこと。また、十分証拠のないことを書かないこと。

- (3) 量の格率 (The maxim of quantity)

書き手と読み手の間の情報伝達において、当面の目的になっていることに必要とされる情報をできる限り提供すること。ただし、必要以上に多くの情報を提供しないこと。

- (4) 関連性の格率 (The maxim of relevance)

書く内容に関連性を保つこと。無関係なことを書かないこと。

- (5) 様態の格率 (The maxim of manner)

不明瞭な表現は避け、簡潔に、順序よく書くこと。

以上のルールを上記20編の作品にあてはめて概観してみると、以下のような問題点が現われて来る。

- 1 読み手をほとんど意識せずに自由気ままに思いつくまま書く。
- 2 書き手がなぜそう思うのか説明が不足していて、読み手に対する説得力に欠ける。
- 3 書き手が伝達したい内容の情報量が不足している上、言葉足らずのために十分に読み手に伝達できない。
- 4 書き手が書くテーマをしぼり切れず、思いつきで、ただただと無関係なことまで書く。20編中、将来、何をしたいかテーマをひとつにしぼって書いた作品は5編のみであった。
- 5 表現が曖昧で、パラグラフ構成の基本的順序 (topic sentence→supporting details→conclusion) を守っていない。
- 6 英語の語彙不足のために自分が本当に書きたい内容が狭められてしまうことがないように未知の単語は日本語をローマ字書きして英文中に混入してもよいと指示したが、実際は、そのようにして内容をふくらませた者は少なかった。20名中6名で、次の語をローマ字書きした。

- A. kankou-kankei (観光関係) ryouritsu (両立)
- H. rekishi (歴史)
- I. uchuhikoushi (宇宙飛行士) kanaeru (叶える)
- J. honyakuka (翻訳家)
- K. youchien (幼稚園)
- R. shodou (書道)

70%の者は自分の貧弱な語彙の範囲内でなんとか書ける内容の英文しか書こうとしない。大学生としてのプライドが英文中への日本語の混入を許さなかったのか。そうだとすれば、これを語彙力強化の動機づけに活かせるかも知れない。今後の語彙指導に試してみたい。

3-0 英語で「書く」能力をいかに伸ばすか

これまで述べてきたように、本学部の平均的2年生は、英語学習にかなり興味を抱いているが、自由英作文を見てみると、多々問題点が存在することが具体的に判明した。このような学生達を動機づけつつ、重大な問題点を解決していく方法として、以下のような対策を急遽講じていきたい。その結果については、後に報告したい。

3-1 語彙力強化法

自分が書きたい話題の方が、課せられた話題で書くよりも、書く意欲が湧くのは当然である。また、抽象的な内容よりも、身近な事柄の方が気楽に書ける。英語で書く場合はなおさらそうである。そこで、英語で自己発信をする準備として、以下の項目について自分の意志で英語による発信をする場合に必要と思う語句をできるだけ多く、今までに読んだ英文中から拾い出したり、和英辞典を引いたりして、自分用の自己発信語彙集を夏休み中に作らせておく。

- (1) 自己PR (趣味、特技、課外活動等)
- (2) お国自慢 (故郷の自然、行事、物産等)

夏休み後、全員に語彙集を提出させて語彙数の多い順に良い評価を与える。おそらく、語彙の殆どが名詞であろう。そこで、それらの名詞に関連した動詞、形容詞も、次のような派生語表をプリントで与え、派生のルールに気付かせた上で補充させ語彙拡大を計る。

(例) 動詞	—————→	名詞
grow		<i>growth</i>
develop		<i>development</i>
translate		<i>translation</i>
decide		<i>decision</i>
形容詞	—————→	名詞
long		<i>length</i>
honest		<i>honesty</i>
kind		<i>kindness</i>
important		<i>importance</i>
形容詞	—————→	動詞
large		<i>enlarge</i>
strong		<i>strengthen</i>
intense		<i>intensify</i>
national		<i>nationalize</i>

3-2 文法力強化法

英語で意味を正しく伝達するために最低限必要とされる文型（基本5文型とそれらの発展文型）に習熟させる例文をプリントで与え、完全に暗記させる。

次に、日本語の表現の多くは逐語的に英語に転換できないことを徹底し、特に間違え易い表現例をプリントで示し、英語的表現法に慣れさせ、英語らしい英語が書ける語感を養うきっかけとする。例えば、

- (1) 日本語の「～は」や「～が」が英語の主語にならない場合。

きのうは楽しかった。

I had a good time yesterday.

お金が足りません。

I am short of money.

- (2) 日本語で主語を表さない場合。

お久しぶりです。

It's long time since I saw you last.

東京から福岡まで飛行機でどのくらいかかりますか。

How long does it take to fly from Tokyo to Fukuoka?

- (3) その他

僕はかばんを盗まれた。

I had my bag stolen.

彼はぼくの頭をなぐった。

He hit me on the head.

3-3 英文の成熟度向上法

前述の通り、学生の書く英文は複文が少く未成熟と言わざるを得ない。その成熟度を向上させる第一歩として、単文や重文を複文に書き換える練習を集中的に行う。例えば、

- (1) 接続語句を与えて、

My car is very old. It still runs very well.

(although)→

Although my car is very old, it still runs very well.

I discussed it with my uncle, for he is a lawyer.

(who)→

I discussed it with my uncle, who is a lawyer.

- (2) 接続語句を与えず、文脈から適当な複文に、

He didn't listen to me, so he failed.→

If he had listened to me, he wouldn't have failed.

The car is very expensive. I cannot buy it.→

The car is so expensive that I cannot buy it.

次に、単独の英文からdiscourseへ導く方法として、数個の英文を論理に叶った自然な順番に並べ換えさせる。例えば、

- () Airlines recommend the following techniques to stop the pain.
- () Sometimes passengers' ears hurt in an airplane.
- () Yawn several times or swallow hard.
- () It is caused by unequal air pressure outside and inside your ears.

one paragraphがtopic sentence、supporting details、conclusionの順で書かれていることを例で示し、応用練習として、複数の英文を上順に並べ換えさせる。例えば、

- () According to a Boston market research company, the number of e-mail users in the US rose by 60 percent between 1992 and 1993.
- () E-mail is becoming more and more valuable because it makes communication so much easier.
- () Experts say that the use of e-mail is growing dramatically.

3-5 e-mailによる動機づけと発信力強化

本学部学生は全員1年時にpersonal computerの操作法を習っていて、これに強い興味を示している。その上、英語学習にも関心を抱いているから、両者を合体させてe-mailで積極的に自己発信させるのが得策であろう。次のような手順で取り組ませる。

- (1) おおまかな内容を紙に下書きさせる。
- (2) spelling, grammarのミスを自分で直させる。
- (3) e-mailの受信者が理解しやすい英文にする工夫をさせる。(どうすればよいか、例を示して指導しておく。)
- (4) 最終チェックをさせてからパソコンに向かわせる。

教師のe-mail addressを教え、それに対して発信させることから始めることにする。受信した各学生のe-mailを直ちに評価し、フィードバックする。

4-0 おわりに

以上の対策を後期の授業から早速取り入れて行くための計画は次の通りである。

- 1 夏休み中に必要な教材作り。
- 2 後期初めにプリテストと授業方針の徹底。
- 3 英語VIの授業の前1/3の時間を指導にあてる。
- 4 毎月1回自由英作文を書かせ提出させる。題は自己PR及びお国自慢に関するものとし、多様な文型使用と多くの複文使用を義務づける。e-mailで担当教員に作品を送ることを推奨する。
- 5 フィードバックを毎回できるだけ早く行う。
- 6 後期終わり近くにポストテストをして成果を検証する。

REFERENCES

- Grabe, William and Kaplan, Robert B. (1996)
Theory & Practice of Writing: Longman
 Kasper, Gabriele and Kellerman, Eric (1997)

- Communication Strategies: Longman
Levinson, Stephen C. (1983)
Pragmatics: Cambridge University Press
Mei, Jacob, L. (1993)
Pragmatics, An Introduction: Blackwell
Hogue, Ann (1996)
First Steps in Academic Writing: Longman
Blanchard, Karen et al. (1994)
Ready to Write: Addison-Wesley
Okihara, K. et al. (1984)
「英語のライティング」(英語教育学モノグラフシリーズ) 大修館
Ohnishi, M. et al. (1993)
「新英語科教育の展開」 英潮社
中学校学習指導要領 (平成元年3月15日 文部省告示)
高等学校学習指導要領 (平成元年3月15日 文部省告示)